

## 解答

問一 エ

問二 ウ

問三 自分たちの常識を基準に、食べ物で他の集団の人間としての価値を判断するという間違いを、世界の人類が共通して犯しているから。

問四 あ イ い ア う ア え イ

問五 「食べ物」と認識していない草木や犬猫、極端に言えば人間までもが、「食べられる物」の一種だから。

問六 所属する集団に共通する常識を作り、それを価値判断の基準として生きることしかできないということ。

冬来たりなば、春遠からじ。

問一

去年もらった手袋は大切に取ってあり今年もはめていますと示し、Aの祖母に感謝の気持ちを伝えるため。

問二 自分のお古の手袋で喜んでるBに対して優越感を感じてしまったことを、つらく思う気持ち。

問三 下に落ちたBを大声で呼んだが返事がなく、その静けさが長く感じられ、Bが無事であるか不安が増してきている。

問四 (1) Bが屋根の上では自分よりはるかに活動的であり、リードする立場にあると認めること。

(2) Bが山の斜面を滑り落ち、そこから無事に戻ってきたという出来事によって、Bに対する親しみが深まったと同時に、Bの冒険心や愉快さから、やはりBは自分にとっての勇者だと実感し、Bとの友情を再認識したから。

問一 山の、ふだんは美しく穏やかだが、ひとたび天候が悪くなると、人間の力ではどうにもならないほどに荒れくるる危険な様子。

問二 登山という自然との対話を楽しみ、充実感やすがすがしさを身体中で感じている気持ち。

問三 苦勞をしてやっとの思いで山を登りきったという達成感と、地球という大きな自然の中に生きているよろこびをかみしめる気持ち。

## 解説

問一

傍線部の一文を読むと「往々にして『食べられる物』ということ、個人的な好き嫌いによる『食べられる』、『食べられない』ということと混同する人がいますが、ここでの『食べられる』、『食べられない』というのは、個人的な好みではなくて、人類としてという意味です」とあります。したがって、まず、好き嫌いによる『食べられる』、『食べられない』ではないことがわかります。では、どんな意味かということ、一行目に「人間が食べても生命に支障がないもの、すなわち『食べられる物』とあるので、「人類として」というのは、エの「人間の身体にとって害になるかどうか」という意味になります。

問二

「ケニアのマサイ人が納豆を食べても、フランス人が納豆を食べても、命に支障はありません。しかし同時に、彼らにとっては納豆は『食べ物』ではありません」とは、彼らにとって納豆は食べようと思えば食べられるものだが、日常的に納豆を食べるとい文化はないということ。

問三 「この傾向は、困ったことに、世界の人類に共通した『他者の見方』でもあるのです」ということは、世界の人類の他者の見方に何か困った点があるということですね。それは「この傾向」という指示語の範囲のはずですから、直前の「自分たちの常識を基準にして、他の人間集団が食べている物から、その人々の人間としての価値までも評価してしまいう傾向」があることに筆者は困っているのだとわかります。

問四 アの「食べ物」とは、その地域の人々が食べている物のことで、イの「食べられる物」とは、食べようと思えば食べられる物のことです。ですから、イの「食べられる物」の中からアの「食べ物」が選ばれているのです。したがって、「あ・え」がイの「食べられる物」、「い・う」がアの「食べ物」となります。

問五 なぜ人口が増えても地球が食糧危機にならないのでしょうか。傍線部④の一文を読むと「少し怖い話かもしれませんが、単に生理学的な論理で話すならば、」と条件があり、傍線部の後に「身の回りの草木、犬猫が『食べられる物』であるところか、人間そのものも立派な『食べられる物』の一種だからです」とはっきり理由が述べられています。

問六 「人間には『文化』が想定され、それにしがみついて生きている」ということの意味を説明する問題です。まず「文化の想定」とは、人間がその地域ごとに独自の常識を作ることであり、「それにしがみついて生きている」とは、その常識を基準にしか生きられないということを表しています。

二 「冬来たりなば、春遠からじ」とは、「厳しい冬が来たということは、もうすぐ暖かい春が来るということだ」という文字通りの意味と、「つらい時期を乗り越えればよい時期は必ず来る、苦難を耐え忍んだ後に必ず喜びに満ちた幸せがやって来る」という意味もあります。

三 問一 直後の祖母の会話から読み進めると、『あの子は、可愛いとこのある子だね。去年あげた手袋を、今年もちゃんとはめているよ』そこで、AははじめてBの仕草の意味が分かった。S Bの仕草は、『もらった手袋は大切に取っておいて、今年もはめていますよ』というものだった」とあるので、Bは、去年いただいた手袋を今年も大切にしています、と祖母に感謝の念を伝えなかったのでしょうか。

問二 まず「その二つの感情」とは、直前の文にある「Bが喜んでいてくれる」という喜ばしさと、「Bに恩恵をほどこした」という気持ちです。そして、この二つの感情ではない心が動いたのですから、他の気持ちを考えると、傍線部の直後で「Bの顔が笑顔のままかすかにこわばったようにおもえた」とあります。これは「Bに恩恵をほどこした」という気持ちが強くなったことから優越感を感じてしまった自分が、つらくなってしまったということですが。

問三 「すべての音が吸い取られてしまう」とは、辺りがしーんとして静かだということですが。屋根から落ちたBを「おい」と大声で呼んでも返事がなく、その返事を待っている時間が長く感じられ、その分だけBが無事であるか不安がつつのっている様子が読み取れます。

問四 (1) 「『Bは冒険のできる男だ』ということが、反発することなくAの心に収まる」とあるので、「Bは冒険のできる男だ」ということにAは反発しないのです。これを具体的に説明すれば、屋根の上では、Bは勇者、つまり、活動的で自分をリードする立場にあるということを知っているということですが。

(2) (1)と同じように「その滑稽な格好は、Bが勇者であることを傷つけてはいない。かえって、『Bは冒険のできる男だ』ということが、反発することなくAの心に収まる」を手がかりにします。そして、直後に「AとBとは、あらためて腹の底から笑い合い、S二人の少年の人間関係はこの上なくなめらかであり」とあるので、Bが屋根から落ちて無事に戻ってきたできごとにより、AはBにさらに親しみを感じ友情を厚くしたのです。

#### 四

問一 「何のどんな様子」という問いですが、まず「何の」は「山」のことだとわかります。後は「いつもはおとなしいが 暴れだしたら手のつけられない、大きな牛」の様子を考えればいいわけですが、「山の、いつもはおとなしい面、暴れ出したら手のつけられない面」とはどのような様子でしょうか。天候のいいとき、悪いときなどの様子を考えると自分のことばで説明しましょう。

問二 「このよるこびのひととき 蛇のころは山よりも大きくなる」の「蛇」は登山をしているぼくのことですね。第4連には「けれど今ぼくらの中を まじりつけなしの風がふきぬけ」とあり、ぼくらが登山を通じて自然を身体全体で感じて喜び、すがすがしさや充実感にひたっていることがわかります。

問三 最後の連の「いかにも地球にこしかけて いっぶくしているぼくらのいのちだ」とは、ぼくらが山を登り切り座って休んでいる様子が想像されます。このときのぼくの気持ちを考える問題です。登山の達成感(満足感)はもちろんのこと、それだけでなく、ふだんの生活では味わえない地球上の大自然を満喫し、生きている喜び(幸せ)を感じているのではないのでしょうか。